

---

# となりの

F

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

となりの

### 【Zコード】

Z5040D

### 【作者名】

F

### 【あらすじ】

ああ神様。ごく普通で乙女な私の輝かしい高校生ライフがどうしてこんなことになってしまったのでしょうか…？自称一般女子高校生が、可愛くて人気者の彼の本性を垣間見てしまったお話。

となりのかれはへんたいだ。

「いつ言つと、いかにも暗くてジメジメした雰囲気を纏つている男を思ひ浮かべるかもしけないが、そうではない。むしろ、彼は美形の類に入る顔を持つた人気者である。

佐藤 祐樹という甘美な響きを持つ名前、はにかむ笑顔、透き通つたような肌、高校1年生にしては低い155cmといつぱりマムさ、こっちが押し倒していじくりたい衝動に駆られる栗毛の柔らかい髪質…おっと、ここまで言つと私が変態扱いされそなので、自歎するとしてよ。

話がそれた。

とにかく、見た目でいえば、決して変態のカテゴリーには入らないだろう人である。  
見た目でいえば。

もとはといえば、私と彼は、席が隣合つてゐるクラスメートという間柄。

男子とは積極的に関わらない純情な私にとつて、話したことなんて一度もない関係だったのだ。

ただ、日々ちらりとその姿を垣間見てはその美しさに陶酔したり、彼の姿を見かけるたびに思わず見入ってしまう行動なんぞはしていたが。

そんな輝かしい日々を送っていたある日。とこ「うか昨日。

放課後、忘れ物を取りに戻った教室で、彼と女の子が、その、いいかがわしいことをしているような場面と鉢合せをしてしまい。それを見た瞬間、私の中で何かが音を立てて崩れた気がした。あれはなんだ。

純粹培養で可愛らしいあのサトウユウキなのか！？

信じがたい光景に睡然としてしまい、思考と身体が停止していたのだが、彼はいち早く侵入者に気づいたらしく、接吻をしつつ可愛らしい大きな目を細めて私を見つめた。

その瞳を見た途端我に返り、脱兎の如く逃げ出したのだった。

そして、今に至る。

故に、私の彼に対する評価が「かれはへんたいだ」なのである。

まあ、彼も男性であり、多少女の子ともそーゆーことをしたいお年頃だらう。

ここまでには譲歩して考えても、接吻をしつつ他の女に笑いかけるとはどういうことか。

しかも、いつものようなキラキラの笑顔ではなく、捕食者の「」とく、獣のような瞳でニヤリと笑うなんて。

あれはへんたいだ、へんたいを通り越してオオカミさんなんだ。あの場に居合わせなければ、いつものように純真無垢な彼の姿を疑わずに見つめ続けることができたのに…。

そういうわけでとりあえず落ち着いて、じつして日記を綴つている次第である「何やつてんの？」

…ん？

な、なんだろ？…今、後ろから妙に甘ったるい美声が聞こえてきたのは『氣のせい』だろ？

いや、『氣のせい』に違いな「何やつてんの？」

……」「この状況はどうすればいいのですかお母さん！

彼だ。彼に違いない、というか彼しかいない。

ああ、どうしてこんな時に限ってまた人がいないのだろうか。

私は自分のあまりの悲運に嘆きつつ、ギギギと変な音がつきそつなくらい不自然に首を回して後ろを顧みた。  
わあ、えがおだまんめんのえがおだー。

「ど、どうしたの、佐藤くん」

「んー、高橋さん、何やつてるのかなあと思つて」

と、笑いながら話しかけてくる佐藤くん。

あ、はじめて名前を呼んでくれたな。

そんな現実逃避をしていた私に再度彼は問いかけた。

「で、何やつてんの」

何つてあなたはへんたいだと書いていたのですよとは正直に言えるわけがなく、「や、今日の授業のノートとるの忘れちゃって…」と苦し紛れに応える。

「へー、やうなんだ。高橋さん、今日上の空だつたもんねー」

「そ、 そうだつたかなつ！？」

「うん、何かぼーっとしちゃって

「そんなに昨日のこと衝撃的だつたの？」

ああ、うんそうなの... と言いかけて  
はつ...

笑が付いた時はは 柔和な笑顔が捕食者のそれは変わっていた  
おまけに私にどんどん近寄ってきた。ややや近いですよ佐藤殿。  
うしてそんな嬉しそうなんですか佐藤殿。

ジリジリと近づいてきた彼に反射的に日記を両手で抱えながら後ろへと下がっていく私。

あれ、でも私の席一番前の窓側だからすぐに席か……と思つたら、もう窓際まで追い詰められていた。

「ななななどじうしたのつかなつ！？」

「うん、さすがにあの時は迷ひようかなないと思つたんだけどさ」

わ、私は何も見てないし何も言いませんよたとえあなたが捕食者の一面を持っているとしても！！

「……へえ、そんな風に思つてたんだ」

あ、もしかして今の口に出してた?  
それに、今声のトーン下がったよね?

私の馬鹿ーと心の中で詰つつい、もつだめだと呟つてしゃみと皿を瞑つた瞬間。

瞼に暖かい感触が押し付けられた。

…………ん？「これは、ひょっとすると、もしやー？  
と、動搖して動けない私に追い討ちをかけるよひー、おでー、ほつ  
べ、鼻先、そして首筋へと…

「ちよちよ、ちよつゝわ、わといいくんーー？」

必死の声にも彼は意に介さず、そのまま音を立てて首筋に口付けた。

もう、抵抗もする気がおきず、ボーッとして座り込んでしまった私の顔を見て彼は満足げに笑い、最後に耳元で囁いた。

「変な氣起こして、嫌な噂、流さないでね。

あと、今度から見張らせてもらうから、響。

と、脅迫めいた言葉とさつづなく下の畠を呼び捨てにして彼は去つていった。

嵐は去つた。

けれど、明日から更なる災難に見舞われそうな気がしてならない。

嗚呼、私の輝かしい高校生ライフが！！

もはや、完璧にキャラ変わっちゃってるよ佐藤君！

とりあえず、腰が抜けてしまつたみたいで動けないこの状態。

ため息をつくしかないではないか。

(後書き)

1作目。

どうして、またこんなお話を作ったのか。

とりあえず、学校・青春・腹黒さをアピールしたかったです。

後日、連載開始予定。

感想書いていただければ幸いです。励みになります。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5040d/>

---

となりの

2010年10月10日03時10分発行